

よく練られた台湾女性史の入門書

小山 静子

本書を手にとつてみた人は、まず表紙に目を奪われることだろう。艶やかな花々に縁取られた表紙中央には台湾の女性画家、陳進の「花を持つ少女」（一九四七年）という絵が掲げられており、その絵には胸を張り、しっかりと目を見開いて前方のやや上のあたりを見つめている女性の姿が描かれている。自転車を押していることとあいまって、その姿はまるで前を進もうとする自らの意志を体全体で表現しているかのようなのである。わたしは思わずいい表紙だなあと見入ってしまった。

本を書評するにあたって、このように表紙について語りはじめることは本末転倒といわれるかもしれない。しかしこの表紙は、本書の内容と本書に託した執筆者たちの思いを象徴するようにわたしに

は思え、本書に対する興味をかきたてられた。

本書の記述の多くは、台湾人研究者が執筆し、それを日本人研究者が翻訳するというスタイルをとっているが、本書の執筆・翻訳に関わったのは、一人の編纂委員と七一人の執筆者・翻訳者である。これだけの大所帯をまとめあげた編纂委員会の力に敬意を表したいが、本書のすばらしさは、何ととっても、「入門」というにふさわしい本とするために、編纂委員会がさまざまな工夫を凝らしていることである。わたし自身は日本女性史を研究しており、台湾女性史にはまったくの門外漢であるので、いわば素人の目から本書にどのような工夫の跡を見いだしたのか、このことについてまず指摘しておきたい。

台湾女性史入門編纂委員会編
台湾女性史入門



A5判 260頁
人文書院 [2730円]

本書は以下の九章から成り立っており、実に幅広い領域のテーマが取りあげられていることがわかる。

- I 婚姻・家庭
- II 教育
- III 女性運動
- IV 労働
- V 身体
- VI 文芸
- VII 政治・ヒエラルキー
- VIII 信仰
- IX 原住民

これらの章タイトルを一瞥しただけで、女性史として論ずべき内容が網羅されていることがわかるが、論じられている時代は、主に一九世紀後半から現代に

及んでいる。また台湾の複雑なエスニシティを反映して、それぞれの章では、いわゆる本省人や外省人のみならず、原住民、さらには新移民女性にまで、目配りの利いた叙述がなされている。

そしてそれぞれの章は八―一二の項目、全体でいえば七九項目から構成されており、これらの項目はすべて見開き二ページに収まるように、その内容がコンパクトにまとめられている。一例を挙げれば、I章には婚姻法・離婚法という項目があるが、ここでは、清末台湾の『淡新檔案』から二〇〇二年の民法親属編の改正まで、婚姻と離婚に関する法が通時的に紹介されている。

入門書という点、つい通史を想像してしまうが、そうではなく、テーマごとに叙述がなされているのが本書の特色であり、読者の興味にしたがって、それぞれのテーマを自由に読み進めることができるのである。しかもその二ページの中に、写真や図表などが必ず挿入されており、読者の理解を手助けしてくれるので、実際に読みやすかった。また「研究案内」も

項目ごとであり、より詳しく学びたいと思ったときに、どういう文献を読めばいいのか、日本語・中国語文献が何方紹介されていて、それは良質の読書案内となっている。

さらに各章のおわりには、主に現代的なテーマを扱った「コラム」欄が設けられており（たとえばI章には、少子化、女性の社会進出とベビシッター、同性の伴侶、台湾のDV防止法の特色、という項目がある）、各項目が一―二ページにわたって叙述されている。このような「コラム」欄の項目は全部で四二あるが、わたしはこれらを読むことで現代の台湾社会をより深く知ることができるようになった。このように、歴史書にもかかわらず、現代への志向性が強いこと、過去と現代とのつながりを重視していることも、本書の特色といえるだろう。

そしてもう一つ、初学者の理解を助けるものとしてありがたかったものは、台湾の行政区画図や地形図、台湾政治史と女性史関連の年表が掲載されていたことである。専門家にとっては当たり前の地

名なども地図で確認することができ、このような点にも入門書としての本書の配慮を感じることができた。

このように、本書は台湾女性史に関する基礎知識を与えてくれる本であり、まさに入門書と呼ぶにふさわしいものである。わたしは本書から実にさまざまな知見を受け取ることができたし、台湾女性史に関するはじめての入門書が、このような本として刊行されたことを心から喜んでいる。

しかし正直に告白すれば、台湾女性史の門外漢であるわたしが本書を通読するのは、なかなか骨が折れることであつた。というのは、あまりの情報量の多さに圧倒されて、知識が断片化されてしまい、それぞれの項目についての歴史的变化はおいても、各項目の横のつながり、すなわち、それぞれの時代の特色やある時代に生きた女性の姿が見えにくくなったからである。歴史の叙述をする際に、時代ごとにするか、テーマごとにするかという問題は悩ましい問題であり、時代が見えにくいということは、後者を選択した

本書が必然的に抱え込んでいる困難であるといえるかもしれない。

しかしそれは、初学者にとつては困ったことであるようにも思う。台湾は、一七世紀末から現代まで、清朝への編入、一八九五年における日本の植民地化、日本の敗戦を契機とした中華民国への復帰と一九四九年の国民党政権の成立、そして一九八七年の戒厳令の解除、と政治的に大きな変動を経験している。ということは、それぞれの時代において女性たちがおかれていた状況には大きな違いがあるということであり、時代ごとの把握というものも必要になるのではないだろうか。「台湾人女性」の実体は時代によって異なり、一様ではないという指摘が本書でなされているが、そうであればなおさら、それぞれの時代における把握ということが重要になってくるように思う。しかし本書では、それはなかなか困難な営みになってしまふ。

たとえば、日本統治下において台湾の女性たちはどのような状況を生きていたのか、その全体像を明らかにしたいと

思っても、そのような枠組みで本書は構成されてはいないので、教育、女性運動、労働、政治といった個々のテーマにおいて叙述されていることを読者は自力で統合していかねばならない。けれどもそれはなかなか初学者にはできないことである。あるいは、現代の台湾における国会議員の女性比率の高さや女性裁判官の多さが指摘されているが、このような現実が生じた要因をどう考えたいのか、あるいは本書で記述されているどのテーマと結びつけてとらえたいのか、考えあぐねてしまふ。そういう意味では、難しいことはわかっているながらも、もう一工夫できなかつたのかと、つい思ってしまった。

そしてもう一つ感じたことは、教育や労働、政治などに関して、もう少し男性との対比において女性のおかれていた状況が叙述してあれば、より理解が深まったのではないかということである。本書を通してわたしは、台湾人女性の状況を考察する際には、エスニシティとジェンダーという二重の規定要因を考慮

に入れていかなければならないことを改めて感じた。とするならば、台湾人女性がおかれている複雑な状況を解きほぐして理解していくためには、対称軸として、男性の状況を把握することが必要不可欠であるように思う。

随分と気ままな言葉を書き連ねてしまったが、ここで述べたことは、限られた字数で入門書をまとめるという本書の課題を超えた、ないものねだりであるとの誹りを免れないであろう。そのことは承知しているのであるが、わたしは本書を良質の入門書であると感じたので、つい思うままに無理なことも述べてしまった。書評というものが今後の新たな研究を生み出すための批判的作業であるということに鑑みて、本書の執筆者たちの寛恕を願う次第である。

(こやま・しずこ 京都大学)

